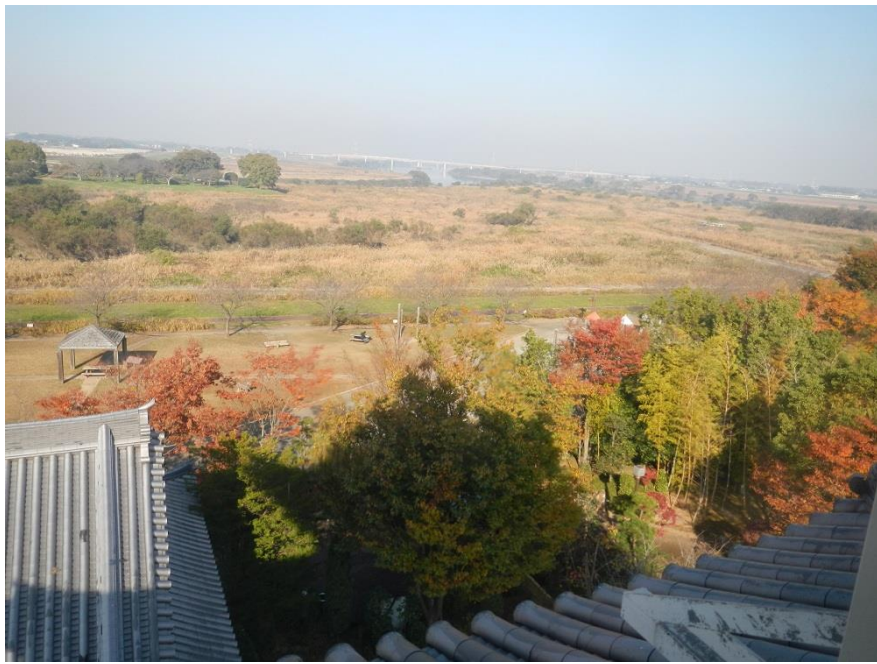


水を治め、水を利用する 伊奈忠次・忠治父子の物語



関宿城から見る利根川・江戸川分岐点

新井宿駅と地域まちづくり協議会（A G C）

目次

はじめに	3 ページ
伊奈熊蔵忠次年表／忠次前半生	6 ページ
関東入府	9 ページ
関東代官頭	10 ページ
関ヶ原後	11 ページ
伊奈忠次のグランドデザイン	12 ページ
忠次の後継	16 ページ
伊奈半十郎忠治年表／唯一の関東代官頭	18 ページ
利根川東遷	20 ページ
東遷の意図	23 ページ
赤堀川と江戸川（治水と水運）	27 ページ
爰灌爰溉、以種以植、産業利民、貢賦富国	29 ページ
関東郡代の成立	31 ページ



水戸備前掘にある忠次像と川口キュポラ 1 Fにある忠治像

はじめに

今年は台風の上陸が多く、各地で河川の氾濫など水害が相次ぎました。巷間、地球温暖化だの異常気象だの、さも近年の特別な現象の様に言われていますが、有史以来人間社会が水害に悩まされなかった時代はありません。降雨、河道、流量は自然現象なので人知ではどうにもなりません。また、水が少なくても死活問題に直結します。ゆえに人々は天に雨を請い、地に神を祀りました。古来為政者の仕事は水を治めることだと言われます。ことに日本は狭い国土に山が多く、雨が多く、急峻な川筋を水が駆け下ってくるような河川ばかりです。大陸の大河のようにあふれた水が広大な範囲をじわじわと侵食してくる氾濫と違い、ひとたび大雨が降ればその水は大小無数の河川に集まり、

中流、下流域で本流と合流し、猛烈な濁流となって堤防を壊し、乗り越え、人も家も押し流し田畑を泥で埋めてしまいます。現代の土木技術をもってしてもその制御は難しい。ましてや重機もコンクリートもない時代の治水の困難さは現代人には想像が付きにくいかもしれません。

しかし私たちの先人たちは水害に会うたびに教訓を得、その理を知り、水の制御の術を蓄積させてきました。また、その事業に何世代もの月日を費やし、自分たちというよりも次世代の為に取り組んでいたという事実は決して忘れてはならない歴史です。

江戸時代関東の治水利水に腐心した伊奈氏は、代表的な利根川東遷事業に60年、葛西用水の完成にさらに60年を費やしています。試行錯誤の、困難の連続だったと思います。簡単に成し遂げられなかったことは事業の大きさ、月日の長さでわかるでしょう。農民を主として、商人、職人たちと5代、6代にわたり共に汗を流し同苦して、あきらめずに事を成し遂げた為政者が庶民の信頼を集めないわけがありません。今日的な悪代官のイメージとは全く違う姿です。

代官は実際には旗本でも家格の低い者が登用されることが多く、激務の割に報われることが少なく、それどころか何かあれば即刻罷免されるという過酷な役職でした。それゆえ領民に気を使うことが多く、

善政を施す人が多かったそうです。中でも関東郡代伊奈家は代官の最高峰としてふさわしい善政を12代に渡って相続してきました。

その源流は初代の忠次（ただつぐ）とその子忠治（ただはる）によって築かれたものです。この父子の生き様そのものが家訓となり代々受け継がれたからこそ不動の代官家たりえたのです。

現代の関東に生きる私たちも、関東の基礎をつくったこの父子に目を向けなければならないと思います。なぜなら、私たちがこの関東の由来を知らないというならば、自らの父母祖先の恩を忘れているのと同じことだからです・



川口市赤山源長寺にある伊奈家頌徳碑

伊奈熊蔵忠次（くまぞうただつぐ）年表

西暦	年齢	事績	世相
1550		生誕	
1563	14歳	一揆側につき家康と戦う。敗れて追放	三河一向一揆
1579	30歳	信康の家臣だったため再び出奔（堺）	築山事件
1582	33歳	忠次のみ家康に帰参し伊賀越えに同行	本能寺の変（伊賀越え）
1590	41歳	徳川家康関東入府。関東代官頭に任ぜられる	豊臣秀吉の小田原征伐
1591	42歳	小室・鴻巣に1万石を賜り、小室（伊奈町）に陣屋を設ける	
1592	43歳	忠治生誕	文禄の役
1594	45歳	会の川の締切、千住大橋の架橋、中条堤の築堤	
1597	48歳		慶長の役
1600	51歳	この頃元荒川と綾瀬川を分離	関ヶ原の戦い
1602	53歳	7月常陸国旧佐竹領に入り仕置きをする	佐竹義宜秋田に移封される
1603	54歳	下野国の検地	江戸幕府開府、江戸の総普請始まる
1604	55歳	備前掘（本庄市・深谷市等）の開削	
1606	57歳	忠治、勘定方に出仕。植田谷領805石を賜る	
1607	58歳	忠次過労により昏倒する。数日ののち蘇生	
1608	59歳	尾張総検地を行う。長男忠政大番頭に任ぜられる	
1609	60歳	木曾川左岸に御困堤を築造	
1610	61歳	備前掘（水戸市）の開削	
* 年齢は数え年			

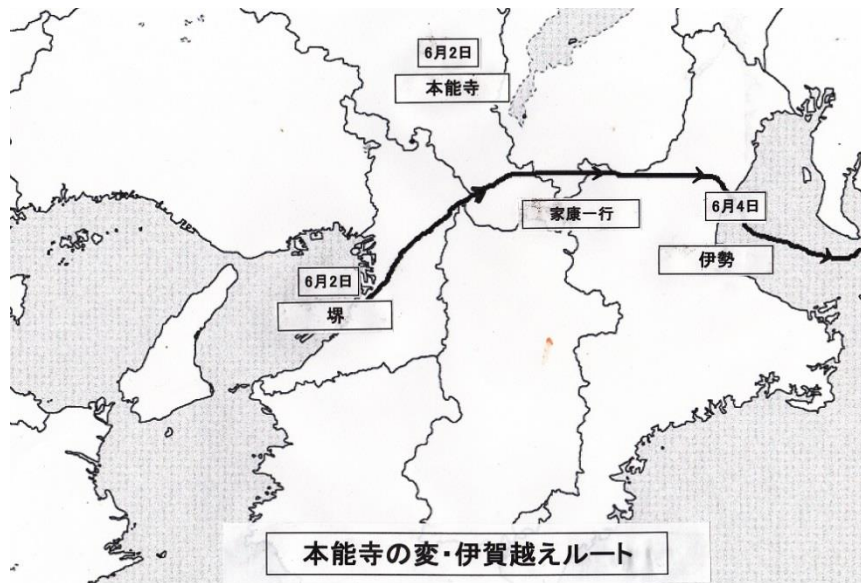
忠次前半生（関東入府まで）

忠次は天文 19 年（1550 年）三河国幡豆郡小島（愛知県西尾市）城主、伊奈忠基の十一子、忠家の長男として生まれました。幼名は熊蔵、のちに備前守と称しています。戦国乱世に生を受けたものにふさわしく波乱万丈の生涯だったことが先の年表を見ただけでわかります。のちの天下人徳川家康の信頼が厚かった忠次もなかなか出世の機会に恵まれなかったようで、苦難の半生を過ごしています。

永禄 6 年（1563 年）三河で一向一揆が起き、家康の家臣団は家康側と一揆側の真っ二つに分かれて戦いました。（家康の生涯の 3 大危機に数えられる事件。残りは武田の大軍と戦って木端微塵に敗れた三方ヶ原の戦いと本能寺の変のときに堺から伊勢に逃れた伊賀越え）結果一揆軍は敗れて一揆軍についた忠家は三河から追放されてしまいます。父子で放浪生活を送った忠次は生活の為に雑役に従事し、土木技術を学んだと言われています。

忠家・忠次父子が再び三河に帰参するのは天正 3 年（1575 年）長篠の戦いで織田徳川連合軍が武田勝頼を破ったときでした。この時忠家は家康の嫡子信康のもとに参じ仕えることになります。しかしそれもつかの間、信康が武田に通じていたとして織田信長から自刃を命じられます。（家康の正妻の築山殿も暗殺される）この処置に不満を持った忠家・忠次父子は堺の叔父のもとに出奔してしまいます。このまま堺で商人の道を歩むはずでしたが、人生はわからないものでこの後人生最大の転機が訪れます。

天正 10 年（1582 年）6 月 2 日、明智光秀が突如謀反を起こし主君の織田信長を本能寺で討ってしまいます。信長の勧めで堺を見物中であつた家康一行は知らせを聞いて驚愕しました。供のものを含めて 30 名足らず。すでに光秀が追手を放っているはず。一刻も早く逃げるほ



かありませんが、本国に戻る保証はどこにもありません。このとき、忠次は家康の近習の小栗吉忠を通じて家康のもとに馳せ参じます。忠次一世一代の賭けに身を投じることになったのです。一行は堺から伊賀を越えて伊勢まで逃避行しますが、この道行がいかに際どいものだったかは、途中なぜか家康一行と別れた穴山梅雪らが落ち武者狩りで落命していることから分かります。

一行は茶屋四郎次郎などの機転により辛くも脱出に成功します。忠次はこの伊賀越えに同行して家康と生死を共にすることによって、二度も主君に背いた罪を許され三河に帰参することができたのです。ここから忠次は歴史の表舞台を歩くことになりました。その後小栗同心の1人として、内政に、土木技術に、戦の後方支援にと、めきめきと頭角を現していきます。やがて小栗吉忠が没すると忠次がその後を継

ぐ形で同心たちの中心になり、関東入府以降の内政的な課題に取り組んでいくことになります。関東の情勢掌握や検地、家臣への知行割で実行部隊として動いていたのはこの集団だったと思われます。

関東入府

天正 18 年（1590 年）小田原北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされます。これが 7 月 3 日。1 か月後の 8 月 1 日には家康は江戸に入ります。小田原攻めの最中秀吉は家康に三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の 5 か国から関東に国替えを命じます。また、江戸を居城にすることも秀吉に勧められます。もとより天下人の秀吉に逆らえるものではありませんが、家康の家臣団は憤慨します。しかしそんな中伊奈忠次は関東移封を献策します。忠次は小田原攻めのわずかの間に関東・江戸の情勢について調査をしたのか、詳らかな情報を得ていたようです。あるいは家康の密命で情報収集に動いていたのかもしれませんが。家康はその献策を用い即決して江戸に入城します。この日が“八朔の江戸お討ち入り”として代々幕府の重要な年中行事になります。家康の並々ならぬ決意を示しています。忠次はどういう目論見があったのか？そして家康がどういう情報に基づいて判断したのか興味深いところですが、とにかくこの決定が 400 年後の今に続く首都の誕生になりました。天下人の慧眼というほかありません。

関東代官頭

家康は関東入府に際し、4人の代官頭を任命しました。大久保長安、長谷川長綱、彦坂元正、そして伊奈忠次です。それぞれ幕府初期まで手腕を発揮して家康の覇業を助けていますが、中でも家康の信頼が最も厚かったのが忠次でした。この頃はすでに忠次の能力を高く評価していましたが、その信頼ぶりを示す伝説が残っています。



徳川家康（週刊江戸ディアゴスチーニより）

忠次を関東代官頭に任命するときに家康の懐刀の本多正信が忠次に出させる誓詞の前文を書く事を命じられますが、正信が家康に何と書けばよいでしょう？と聞くと。「一つ、関東を自分のように大切にすべし。二つ、部下を依怙最賈すべからず」と言い。3つ目はと問われると、「それだけじゃ」といったと言います。つまりはお前にすべ

て任すから自由にやれ！と言われたに等しいものです。真偽のほどはともかく、その後の忠次の関東における縦横の活躍を見ると、家康の全幅の信頼を得ていたことがわかります。忠次は嬉しかったことでしょう。命を削ってでも応えようと奔走したであろうことが目に浮かびます。

関ヶ原後

慶長 5 年（1600 年）関ヶ原の戦いにて天下を制した家康は、正式に江戸に幕府を開き天下の府に定めます。政敵を駆逐して天下を掌握した家康には京や大阪に府を構えることもできたはずですが、そのまま江戸に府を構えたということは初めから江戸を中心とした国家経営を描いていたことになります。忠次はその構想を実現するべく、小室（伊奈町）に陣屋を置き、検地に、知行割に、治水利水に、評定にと目の回るような忙しきで関東を駆け巡ります。



伊奈町丸山陣屋絵図

伊奈忠次のグランドデザイン

家康や忠次は江戸を天下の府とするには何をしたらよいと考えていたのでしょうか？

- 1、江戸の後背地である関東の民心を治めながら幕領支配を確立しなくてはならない。
- 2、関東の生産力を上げなくてはならない。
- 3、江戸城下を大人口が住めるよう拡大しなければならない。
- 4、大人口を支える物流網を作らなくてはならない。
- 5、乱流して武蔵国東部を襲う利根川を何とかしなくてはならない。
- 6、飲料水用の水をひかなければならない。

天下統一、江戸開府という政治的变化に対応するためにこれらの施策を速やかに実行しなければならない。これは現代まで続く社会基盤整備となります。至難の業であり、巨額を要する事業でもある。しかし未開発の関東だからこそできると考えたのです。

江戸城及び江戸城下の整備は天下普請といって、藤堂高虎を総奉行に全国の大名が駆り出されて行われました。神田山を切り崩し日比谷入江を埋立て、堀を縦横に巡らし、巨石を運んで石垣としました。この工事は30年以上に渡って行われ、寒村だった江戸は壮大な王城に

生まれ変わりました。

しかしそれ以外の施策が滞っては破綻をきたすことが明らかなので、それら一連の施策事業は忠次に託されました。

1 の江戸の後背地である関東の民心を治めながら幕領支配を確立すること、2 の関東の生産力を上げることは忠次に課せられた最も重要な施策でした。戦国の世が終わったからと言っても、未だその気風が残っており、まして北条の遺臣や土豪、寺社勢力が潜在的脅威として存在する関東では、なまじ強権を発動してはたちまち反乱を呼び起こして大混乱になっていたことでしょう。それゆえこれを実行するには誠心誠意事に当たる忠次が適任だったのです。

～具体的施策～

1、 江戸の後背地である関東の民心を治めながら幕領支配を確立

しなくてはならない

これに関して忠次は入府直後から、下記のような施策をしています。

a、検地を通じて土地と石高を測り村々の生産力、人口等を把握する。

b、そのうえで村方3役を中心とする自治村（村請性）を確立する。

*元々中世の村は惣村といって自治組織が確立していましたが、戦国時代になると大名が村の直接支配をめざし惣村の解体を進めていった。江戸初期のこの施策は農村の自治権をある程度戻した形と言える。

c、上記の2つを施行したうえで徳川家臣団の知行割（領地配分・給料制）をする。

d、領地を直接支配していた土豪や寺社を領地から切り離し、知行制（給料制）にして安堵する。

2、 関東の生産力を上げなくてはならない。

幕府開府直後のこの時期、天領（幕府直轄領）の生産力を上げて財政を安定させることは幕藩体制を固めるうえで極めて重要なことでした。そのため忠次は以下の施策を実施しています。

a、治水灌漑を施し耕作可能地をつくる。その新田開発を寺社や土豪などの勢力、また、土地を持たない者に積極的に行わせる。

b、新田村には年貢の免除など数々の配慮をし、また、開発に功のあったものには屋敷地（無租税地）などの特権を与える。

c、桑、楮、炭焼き、製塩など殖産興業を後援する。

＊「関八州は忠次によって富む」と言われ忠次は関東農民から神仏のように敬われたそうです。

これらの施策を見ると開府直後の民政が非常に気を遣いながら行なわれていることがわかります。このためスムーズに幕府支配が確立しました。しかも短期間に膨大な量の年貢割付状や知行書き立てが残っていることから、これらが猛烈なスピードを伴って実施されたことがわかります。また、今日備前掘や備前渠、備前堤といった河川用水の設備が残っているのも忠次の関東開発の遺跡です。

3～6に関しては利根川の中条堤築堤や会の川の締切など利根川

治水の基本構想に着手しますが、完全ではなく後の忠治やその後の子孫にゆだねることになりました。それ以外の事に関してもそうです。忠次の生前では果たせなかったことが、直接または間接的に伊奈家代々の宿題になりました。しかしこれらの宿題に営々として取り組んでいったことが伊奈家の権力基盤になったのですから、伊奈家にとってグランドデザインを描いた忠次が永遠の模範となったのは当然のことなのです。



忠次の没年に完成した水戸備前堀

水戸藩が徳川頼房を初代としてはじめられた慶長 14 年（1609）の頃、城東・城南の低地帯は少しの雨にも千波湖の氾濫に悩まされるばかりか、わずかの日照りにも旱害に見舞われること再々であった。

この時、水戸藩の藩政をつかさどる幕府の関東郡代伊奈備前守忠次は藩の重役とはかり、治水と水田地帯の利水を兼ねて、慶長 15 年（1610）非常な困難を克服して「備前堀」を開き、千波湖の水を引いた。

堀は別に「伊奈堀」とも呼ばれ、下町の商工業を招来したばかりか、当時の浜田村以東二十一ヶ村の水田をうるおし、その恩恵は現代に及んでいる。



結城紬（茨城県観光物産協会HPより）

結城紬は古代からこの地方の特産として知らていましたが、その永い歴史の中でも、存亡にかかわる大きな出来事がいくつかありました。その一つが慶長6年（1601）に行われた国替でした。この時、結城家第18代の城主であった結城秀康（徳川家康の二男）は、越前に67万石を与えられ、家臣はもとより寺院・職人・商人にまで及ぶ町ぐるみの大移動が行われたのです。

そのために紬織りを始めとする諸産業はすっかり衰えてしまうととも、その領域は大名領・旗本知行所・天領に分割されてしまいました。しかし結城紬の産地であった現在の結城市周辺は、その大部分が天領となったため、翌7年に初代代官として伊奈備前守忠次が派遣されて来ました。彼は城下の衰退を憂い、その振興策として紬の改良発展のために力を注ぎました。幕府に要請して信州上田から織工を招き、染色の改善と柳条の織り方の技術を導入したのです。その結果結城紬の名声はますます上がり、紬の生産は増大するとともに、販売市場も拡大して結城紬の名前も次第に広まっていきました。（結城紬の折りと歴史より）忠次の殖産興業策のエピソードの一つです。

忠次の後継

伊奈備前守忠次は激務のため過労で失神するほど働きますが、慶長15年（1610年）に折れるように病没します。意外にもその代官職を嫡男の忠政ではなく次男の忠治が継ぎます。もちろんその8年後に忠政が34歳で没し、その子忠勝も同年9歳で早逝したためですが。

忠政は忠次病没の2年前に大番頭として従五位下築後守に叙されていることから、すでに番方（武人）として忠次遺領を相続することが決まっていたように思います。そして忠次の本業である代官職（役方）は次男の忠治に継がせる。忠次は生前からそのように決めていたのではないのでしょうか？そうでなければ関東代官頭を継いだ忠政が大坂夏の陣に動員されて武将として首級30を挙げる活躍をするなど考えられないからです。それは忠次のささやかな意地ではなかったかと思います。生前忠次は本多忠勝などの武将から戦働きをしないで成り上がったものとしてさげすまれていたそうです。無論主君の家康はそんな考えはなく、むしろ武将以上に重用しましたが、忠次にも三河武士としての誇りがあったのでしょう。多くの兄弟親戚が戦場で死んでいった伊奈家は武門の誉れとの自負があったのだと思います。

いずれにしても元和4年（1618年）に半十郎忠治が関東代官職を継ぐと、忠次の元部下たちの多くが忠治の下に行き、忠治は新しく拝領した赤山に陣屋を構え、ここから伊奈家の関東開発第2幕が上がることになるのです。それは父忠次の引いたレールの上を走りながらも、父に勝るとも劣らない金字塔を打ち立てることになりました。

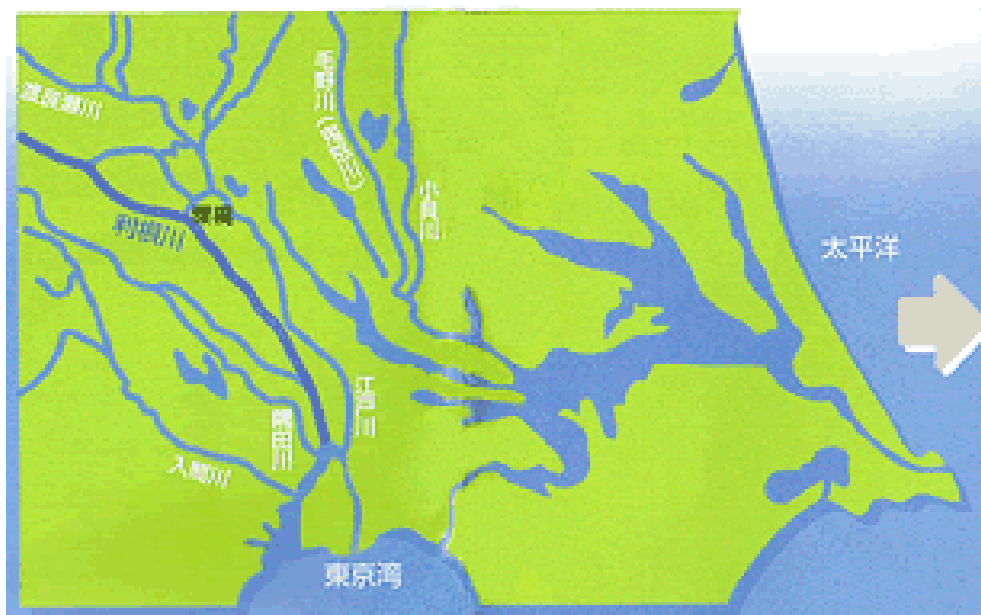
伊奈半十郎忠治（はんじゅうろうただはる）年表

西暦	年齢	事績	世相
1606	15歳	忠治、勘定方に出仕。植田谷領805石を賜る	
1618	27歳	兄忠政が没。家督は嫡子忠勝が継ぎ、代官職は弟の忠治	
		が継ぐ。赤山領を拝領し源長寺を菩提寺とする	
		忠勝早逝(9歳)のため小室藩は改易	
1621	30歳	新川通りの開削。利根川と渡良瀬川が合流	
		第一回赤堀川の開削、鬼怒川・小貝川分離工事始める	
1623	32歳		家光3代将軍に就任
1625	34歳	第2回赤堀川の開削、山田沼堰を普請	
1628	37歳	中山道を付替え、氷川神社参道の西側に大宮宿をつくる	
1629	38歳	元荒川の締切、入間川への付替え、鬼怒川の付替え	
		赤山陣屋を設ける。見沼溜井の造成	
1630	39歳	小貝川の付替え、岡堰(相馬領・取手市)を普請	
1635	44歳	江戸川開削着工	参勤交代制度施行
1637	46歳		島原の乱
1638	47歳	忠治勘定奉行になる	
1641	50歳	権現堂川の掘削、逆川の開削、江戸川の開削竣工	
1642	51歳	忠治関東郡代となる	
1647	56歳	領内に飢民なきをもって褒賞を受ける	
1653	62歳	忠治没、忠克関東郡代を世襲	
		玉川上水着工・竣工(水道奉行として忠治・忠克)	
1654		常陸川浚渫、赤堀川通水、利根川が銚子沖に流れる	
* 年齢は数え年			

唯一の関東代官頭

先に関東入府の際、4人の代官頭が任命されたと書きましたが、大久保長安、長谷川長綱、彦坂元正、伊奈忠次のことで、関東入府から幕府初期あたりまでそれぞれが手腕を発揮して、大いに内政に貢献しました。しかし、長安は死後に不正蓄財を讒言され男児全員が処刑(1613年)。元正も家康の勘気を蒙り失脚(1606年)。長綱は嗣子

なく没しました（1604年）。このように忠次以外の代官頭が継がれることなく次々に消滅してしまったのです。唯一忠次の跡を忠政、忠治と継いだ伊奈家だけが代官頭として残りました。代官は幕府直轄領（徳川家の領地）を支配するのが仕事ですが、代官頭は初期の徳川政権にあって職制が定まらない頃の役職で、あらゆる仕事をこなしました。いわゆる便利屋、何でも屋です。その結果さまざまな権限を持つようになりました。関東郡代伊奈家が広範に持っていた権限は実はこの初期の代官頭の何でも屋の特殊権限がそのまま相続されていったからなのです。伊奈家が単なる代官ではないのはこれによるのです。無論伊奈家にその能力があったからにほかなりませんが。



約 1000 年前の関東の河川

利根川東遷史			
			1
西暦	年号	事績	世相
1594	文禄3	会の川の締切、千住大橋の架橋、中条堤の築堤	
1597	慶長2年		慶長の役
1600	慶長5年	この頃元荒川と綾瀬川を分離	関ヶ原の戦い
1603	慶長8年		江戸幕府開府
1621	元和7年	新川通りの開削。利根川と渡良瀬川が合流	
		第一回赤堀川の開削、鬼怒川・小貝川分離工事始める	
1625	寛永2年	第2回赤堀川の開削、山田沼堰を普請	
1629	寛永6年	元荒川の締切、入間川への付替え、鬼怒川の付替え	
1630	寛永7年	小貝川の付替え、岡堰(相馬領・取手市)を普請	
1635	寛永12年	江戸川開削着工	
1641	寛永18年	権現堂川の掘削、江戸川の開削竣工	
1654	承応3年	常陸川浚渫、赤堀川通水、利根川が銚子沖に流れる	
1657	明暦3年	焼失の為役宅を常盤橋御門内から馬喰町に移転	明暦の大火
1659	万治2年		両国橋架橋
1660	万治3年	幸手用水の開削、びわ溜井用水の開削	
		葛西用水の開削	
1665	寛文5年	逆川の開削、	

利根川東遷

伊奈半十郎忠治は父によく似ていたと伝えられています。風貌が似ていたのかもしれませんが、父の構想思想をよく理解して体現していたのだと思います。唯一の代官頭となってしまった忠治は関東代官頭を兄から引き継ぐと早速“父の宿題”に取り組みます。

その宿題とは江戸時代最大の国家プロジェクトとなった利根川東遷です。何しろ江戸を含めた武蔵国東部は大きな溝の様な地形をしていて、そこを利根川、荒川、渡良瀬川といった大河が乱流して、ひと

たび洪水に見舞われればその大きな溝がそのまま川のようになって襲ってくるのでとても人の住めるところではありませんでした。したがって、利根川をそのままにしては江戸を天下の府にすることなど到底不可能でした。忠治の父忠次は利根川治水こそ関東開発の要だということがわかっていて、入府後すぐに中条堤の築堤、会いの川の締切に取り掛かります。しかし忠次の余生では時間が足りずその仕事は忠治に受け継がれます。

***伊奈忠次が取り組んだ利根川治水ー中条堤と会の川の締切ー**



行田市の中条堤

田んぼの中を延々とこのような堤防が続いている。何とも不思議な光景。



中条堤の防水システム

利根川上流で発生した洪水は利根川左岸の文禄堤に沿って突き進み、中条堤との間にある狭窄部で行き場を阻まれます。行き場を失った洪水は中条堤沿川に流れだし、滞留をはじめます。こうして大きな漏斗として遊水機能を発揮し、下流への水量が制限される仕組みになっていました。貯水量は1億 m^3 もあり、戸田市とさいたま市にある荒川第一調整池（彩湖）の10倍もありました。



道の駅羽生にある会の川締切址（川俣締切址の碑）

忍藩家老小笠原吉次が命じられた工事ですが、伊奈忠次の指導の下に行われました。忍藩の水害対策が直接の目的ですが、この工事が利根川東遷の端緒になりました。

東遷の意図

1618年に関東代官頭となった忠治は3年後の1621年には一気に利根川東遷事業に取り掛かります。年表に一新川通りの開削。利根川と渡良瀬川が合流。第一回赤堀川の開削、鬼怒川・小貝川分離工事始めるとありますが、これらが利根川を江戸湾から瀬替えして銚子沖に通水することを企図していたことは明らかです。利根川東遷の肝は洪水常襲地の武蔵国東部の地溝帯から自然河川を取り去ること。そしてその後用水路を引くこと。渡良瀬川、鬼怒川小貝川などの大河を利根川に結び付けて関東各地および東北と江戸を結びつける巨大な水運網を作ることになりました。スケールと言い効果と言い、とても400年前に構想されたとは思えないほど壮大な事業です。今においても何十年、何十兆円掛かるか想像もつきません。地図も重機も鉄筋もコンクリートもない時代です。近代土木技術もない時代です。徒手空拳で怪物に挑むようなものです。この途方もない構想を信じ巨額を投じて伊奈家にゆだねた徳川代々将軍も肝が据わっています。「もし夫れ利根川改修の如きに至りては、当時全く流域を異にしたる鬼怒川流路の合流せしめたるものにして、到底現今の如き世相においては計画し能はざるの底の大英断なりとす。」（明治以前日本土木史）と評されていますが、正にその通りだと思います。

利根川東遷概略図①

上野国 群馬県

下野国 栃木県

利根川

渡良瀬川

鬼怒川

小貝川

常陸国 茨城県

常陸川

下総国 千葉県

利根川

会の川

荒川

武蔵国 埼玉県

大宮台地

川口

太田川

市川

古隅田川

隅田川

江戸

東京湾(江戸湾)

太平洋

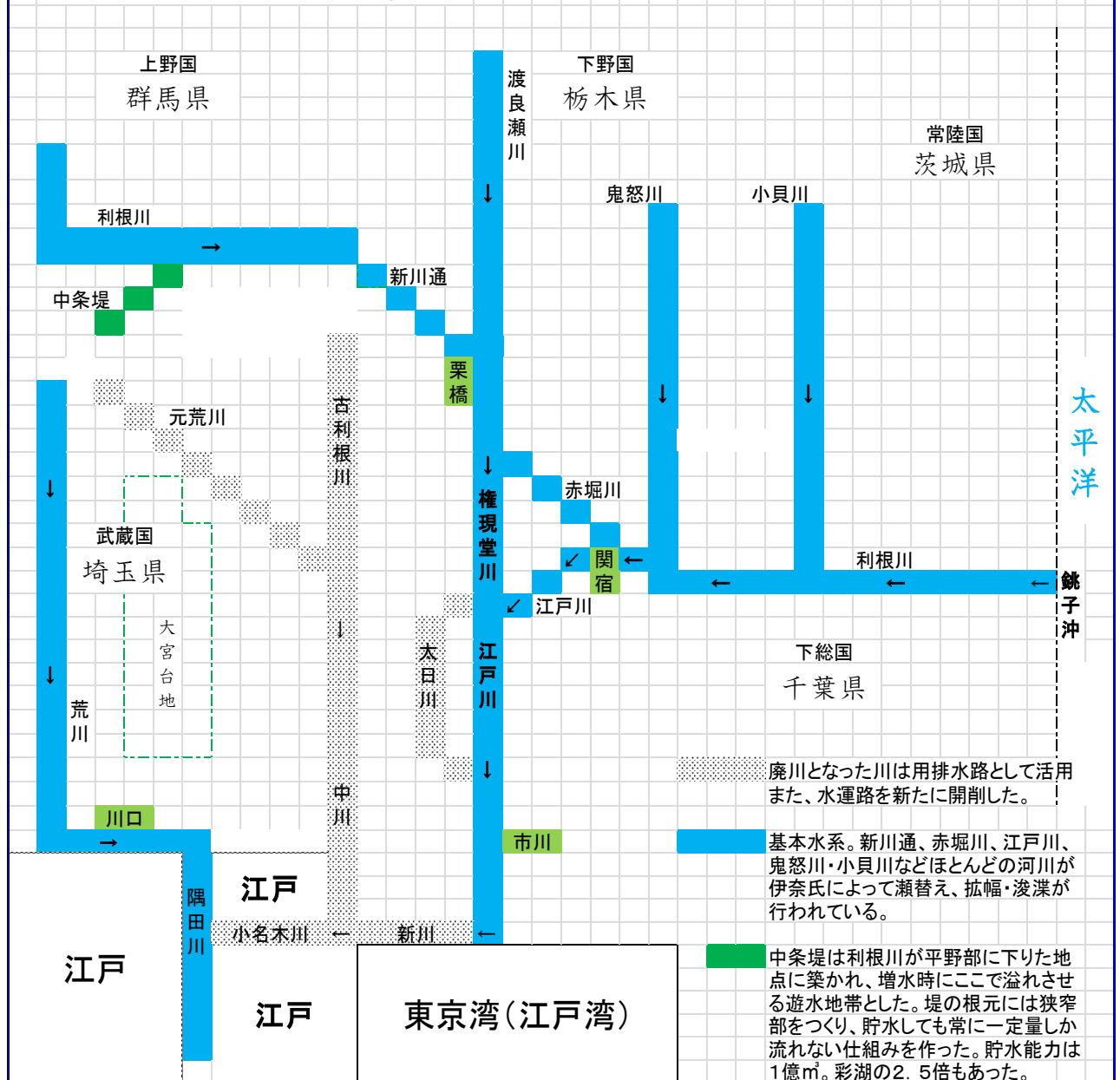
銚子沖

関東入府(1590年)ごろの関東の3水系

- 徳川家康が入府した頃の関東は、利根川、渡良瀬川、鬼怒川の3つの水系に分かれていた。
- 利根川は荒川などの大小河川を合流し、乱流変流を繰り返し武蔵国東部の広大な地域を耕作不能な湿地帯にしていた。
- 江戸も利根川の氾濫による洪水常襲地だった。
- 当時の江戸はいくつもの入り江がある小さな漁村にすぎず、太田道灌の築いた江戸城は寂れ果てていた。

利根川東遷略図① 1590年の関東入府前の関東の河川

利根川東遷概略図②



利根川東遷後の水系(1665年頃)

- 3つの水系が一つの水系になり、流域面積16,840km²(埼玉県の4倍)という日本最大の河川となる。
- 武蔵国東部、小貝川下流部など広大な湿地帯が穀倉地帯に変わる。
- 江戸の水害が減る。
- 関東5か国にわたる巨大水運網が完成する。東北の米などの物資が房総半島を廻らずに銚子から江戸へ直通できるようになる。
- 隅田川以東の水位が下がり、本所・深川などの干拓が容易になり、江戸市街地が拡大する。

利根川東遷は結果として幕府の財政を支え、100万都市江戸府の拡大を可能にし、現在の関東のインフラの基本を作った大事業だった。

利根川東遷略図① 1665年のほぼ完成した後の関東

2つの図を見ると、利根川水系のほとんどが人工で作られたことがわかります。また、この利根川東遷で今に至る関東のインフラが作られたことがよくわかります。これで100万人に及ぶ江戸という都市が成り立ちました。計り知れない恩恵だといえます。しかし難工事に次ぐ難工事。資金不足、人足不足、流路の選定のむずかしさ、瀬替えや工事後の地域に与える影響。立ち退きを強制する住民たちの説得。失敗すれば腹を切るぐらいでは済まないというプレッシャー。これらを乗り越え、やり遂げた伊奈半十郎忠治は江戸期随一の功績、偉人といしか言いようがありません。



関宿城博物館の展望台から見る利根川江戸川分岐点

赤堀川は渡良瀬川・常陸川分水嶺を掘り、常陸川は28キロ下流の鬼怒川合流部まで浚渫、逆川は南の権現堂川・江戸川のその当時の利根川本流から北（逆）に掘って赤堀川につなげた。利根川東遷事業以前はここは原野が広がるばかりで川など無かった。これが400年前に造られた人工の景色だとはとても信じられない。関宿は利根川水運大動脈をつなぐ最重要ポイントであり、難工事が集中した場所でもある。

赤堀川と江戸川（治水と水運）

東遷事業の苦労話は数多く残っています。赤堀川の通水工事2度失敗したときは、地元住民から「赤恥川」と揶揄されたといひます。失敗には違いありませんが、それだけ細心の注意を払ったからなのです。赤堀川は利根川と渡良瀬川をあわせた大量の水の“一部”を常陸川に通して水運の為の水量を確保するための河川工事だったので流れすぎると常陸川下流が氾濫するし、少ないと船が通れないという極めて難しい工事だったのです。



観光船境丸からみる利根川（旧赤堀川）

伊奈忠克が赤堀川通水に成功した当時は川幅が18メートルしかありませんでした。利根川東遷は利根川の本流を太平洋に流すことが目的ではないことがわかります。赤堀川以東の一連の工事は水運網の整備が目的でした。東北から江戸に来る船が潮の流れに逆らって房総半島を迂回して江戸湾に入るルートが危険であるため、銚子から利根川を遡って安全に航行できるようにするためと。鬼怒川を通じて東北諸藩との物流網を作ることになりました。

また、江戸川は父忠次の瀬替え工事によって利根川が渡良瀬川の下流を流れるようになったのですが、そこで氾濫が相次ぐようになりま

した。そこで、利根川の水を安定して排水するルートを開削する必要があったことと、また、北関東や銚子沖から来た船が安全に江戸まで航行する必要から作った人工河川です。調査に次ぐ調査の結果下総台地を掘り進むことになったのですが、大変な難工事になりました。資金も不足し切り開いた台地の木々を工事資材にして余りを売って人足代の足しにするなど苦勞に苦勞を重ねて完成にこぎつけました。



昭和22年のカスリーン台風浸水域

この図を見ると、武蔵国東部低地は上流部で破堤すると旧川筋（古利根川）に沿って江戸まで来てしまうことがわかります。この地形的構造は今も変わりません。ゆえに伊奈家はこの地帯の自然河川を取り除いて、その縁（江戸川）を流すようにしました。実は利根川東遷と聞くと利根川の本流を太平洋に流すことだと勘違いしがちですが、利根川を栗橋で権現堂川に繋ぎ、江戸川に流すルートが本流だったのです。利根川治水は、上流部の中条堤で氾濫を抑え、上記のルートで大半の水を流すことが要でした。



首都圏外郭放水路

国道16号線の地下には首都圏外郭放水路（春日部市）という上図の地域で発生した洪水を吸収する巨大な地下タンクがあります。タンクにたまった水は江戸川に放水しています。つまり埼玉東京東部低地の水害対策の基本思想は伊奈氏の頃から変わっていないのです。

爰灌爰漑、以種以植、産業利民、貢賦富国

忠治の偉業により、関東は広大な耕地が広がり、東北・関東と江戸を結ぶ水路が網の目のように張り巡らされ、江戸と結ばれた地方には野田・銚子の醤油、佐原の酒、猿島のお茶など多くの産業を生むことになりました。また、中条堤、権現堂堤、江戸川を要とする治水システムは機能し、それまでのように流路が頻繁に変わるようなことはなくなりました。

忠治は父忠次同様、関東の民から慕われていました。谷和原領（つくばみらい市）や、相馬領（取手市）ではその頌徳碑が建っています。取手の毛有薬師堂は忠治が眼病に罹った時にその平癒を祈願して建

てられたものだと伝えられています。忠治の人柄が偲ばれます。

「秋になり、小貝川沿いに広がる黄金の帯は、相馬二万石と呼ばれてきた豊かな取手の象徴です。川と闘いながら川の恵を享受してきた市の歴史をさかのぼると、江戸時代に川の道を作った関東郡代、伊奈半十郎忠治に行き着きます。」と取手市のホームページにありますように今も郷土の恩人として扱われています。



小貝川福岡堰とそのほとりに建つ伊奈神社（昭和 16 年建立）

寛永 6・7 年（1629・30 年）当時鬼怒川と小貝川はつくばみらい市の寺畑付近で合流しその下流域を広大な湿地帯にしていた。忠治はこの 2 川を分離し鬼怒川を台地を掘り進んで常陸川（その後の利根川）の 30km 上流に流し、小貝川もその下流の大地を開削し、常陸川に合流させた。この工事の結果広大な湿地帯は水田に代わり、また新たに設けられた山田沼堰と豊田堰、岡堰によって、谷和原領 3 万石、相馬領（取手市）2 万石を潤した。この伊奈神社は福岡堰を見下ろす高台にあり、祭神は伊奈半十郎忠治。1941（昭和 16）年 4 月 18 日の建立。関東郡代として、福岡堰をはじめとする治水事業に取り組み、谷原領開発に功績のあった伊奈忠治公を偲んで建立されました。例祭は毎年 4 月 18 日で例祭を行った後、福岡堰からの取水を開始する。当地では今なお恩人として扱われている。ちなみに 5 万石という土地開発のスケールはどのくらいかというと、江戸時代の川口市の石高が 19,500 石だったのでその 2.5 倍。

関東郡代の成立

寛永 15 年（1638 年）に勘定頭（勘定奉行）に任命されますが寛永 19 年（1641 年）「今まで国用の事（勘定頭）にあずかりしをゆるされ、これより関東諸代官の得失を糺し、堤防修築のことを勾当（専門）すべし」と、勘定頭をはずれ、地方官として関東の諸代官の監督する権限と、河川事業を一手に担うことを命じられます。これが正式な関東郡代の始まりとされています。正保 4 年（1647 年）忠治は「領内に飢民なきをもって」褒賞を受けます。上下共に信頼を集めた忠治は後の伊奈家の地位を不動のものにしたのです。

忠治は赤堀川の通水を見ることなく没しますが、その子半左衛門忠克（ただかつ）が父の遺志を継いで赤堀川の通水に成功します。ここに 60 年に及んだ利根川東遷事業は完成しました。そして忠次の描いたグランドデザインと忠治の築いた権力基盤はその後も子孫に受け継がれていきます。伊奈家菩提寺の源長寺にある伊奈家頌徳碑は以下のように結んでいます。伊奈家が代々良き民政官だったのはこの文に由来しています。

「農政を司る者の務めは暗に（それとなく）古職（古代中国の官職）に当てはまる。治水や道を通し、境界を正し溝を掘り、ここに灌（そ）ぎ、ここに漑（うるお）す。是を以て種をまいて植え、産業民を

利し、貢税は国を富まし、下を勞わり行政を施行する。上に奉じて力を尽くし、訴えを聞いて決し、意見があれば直をもってする。*一万石の祿（知行地）、五位（従五位下）に登用される。子に伝え孫に及ぼし、順々に其の決まりを受ける。」

＊忠次が小室領 1 万石と従五位下に叙されたこと。碑文の原文・訳文は別紙「伊奈家頌徳碑文集」をご参照ください。

以上



鴻巣市勝願寺にある伊奈忠次・忠治の墓

参考資料

関東郡代の終焉	九野啓祐（講談社出版センター）
荒野の回廊	高崎哲郎（鹿島出版会）
家康政権と伊奈忠次	本間清利（叢文社）
週刊江戸	（ディアゴスティーニ）
利根川の東遷（パンフレット）	利根川上流河川事務所

2013.11.17

A G C 新井宿駅と地域まちづくり協議会

関東郡代伊奈氏の200年研究班

新井宿駅と地域まちづくり協議会

〒333-0833 川口市西新井宿 362 リカベル

[\[mailto:info@araijyuku.jp\]](mailto:info@araijyuku.jp) F A X 048-281-9939

会長 鈴木常久